
love every!

黒木 悠貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

love every!

【Nコード】

N4492L

【作者名】

黒木 悠貴

【あらすじ】

俺は普通の高校生なんだけど…

妹に姉にヤンデレとツンデレに愛される日々を送っていたんだ…

そして俺は公園で美佐と出会う。

何とその美佐が俺の高校に転校してきた！

／／／これから俺の日常はどうなるんだ…？

歓迎会編が終了し新章へ突入！

90000pv 13000ユニークアクセス。

月一更新。誤字脱字があつた場合報告をしてくれると嬉しいです。

【登場人物】（前書き）

この小説のキャラ紹介です。
二期もいつかやる予定です。

2010年、11月26日改稿。

【登場人物】

劉蜂大和… 性格は優しく皆から愛されるキャラクターでもある。
この物語の主人公でもある。

<大和の同級生紹介>

赤羽美玖… 大和の幼馴染。大和の事が好きだが、
大和を目の前にすると強気になってしまう
素直になれない女の子。

最上加奈… 大和が通う学校の理事長の娘であり
家はお金持ち。性格は大和一筋。
大和を思すぎてたまに度が過ぎた行動をする。

橘美佐… 大和の学校に転校してくる。
美佐の父は教師をやっている。
礼儀正しく、素直な子。

山中祐二…大和の親友。いつもはふざけているが、
たまに本気になって大和の助けになってくれる
男気がある奴。彼女もいる。

<大和の家族構成>

劉蜂夕菜…大和の義妹りにも大和の事を兄以上に思っている。

俗に言うブラコンである。

劉蜂百合華…大和の義姉。大和の事が好き。男勝りの所がある。

大和の学校では姉が生徒会長をやっている。

革巻杭一…フラグメーカー且、出番があるさいに必ず出費している。

作者自身、不良君の方が主人公に向いているのでは？

と考えは始めている。

【登場人物】（後書き）

だいたいの自己紹介はこのくらいです。

一話【俺の普通の日常】（前書き）

出来ればこの作品をよろしくおねがいします

変な表現があつたらコメントを入れてくれ

ると嬉しいです

一話【俺の普通の日常】

俺がベッドに眠っていると

俺の布団がやけに重い…鉛のような重さが俺の体を伝うようだ。

金縛りだろうか？

俺が目を開けた瞬間それが違う事に気付く…

俺の……妹だった。

「お兄ちゃん…お目覚めのキスしてえ」

そういうことは好きな人とやるものだぞ…夕菜

「拒否、無理、やめてください」

夕菜が二つの桃色の唇を俺の口元へと近づけてくる。

「お兄ちゃんに拒否権などありません」

や・やめてくれ！ 朝だから力が出ないんだ…

「やめろ！ 夕菜！」

ここで俺の姉貴…百合華が来てくれた。

「こついうのはな…キス以上のものもやらなくちゃいけないんだ…」

早速俺の机に向かおうとするのだが…あいつがいる。

「来たわね！ 劉峰大和！ 今日こそ私と付き合いなさい！」

いつもの上から目線の態度…やれやれ…ここは適当にあしらっておくか…

「いや…俺はあなたと付き合うつもり全くないですから…」

勘弁してください…クラスからの視線が超痛いんですけど…

俺の事はほつといて、違う人を好きになることをおすすめします。

俺は君の事を好きになる予定などないので、

違う人を好きになった方が賢明だと思われますよ。

なんか敬語になってるし…

「あのお…ここはあなたのクラスではないでしょ…自分のクラスに帰ってください

ていうか…帰れ…」

そして永久に俺の目の前から存在を表さないでください

俺の1ヶ月に1度のお願いです。

「この私に帰れと…理事長の娘に向かってそんな口聞いているのかしら？」

胸を張って誇らしげに笑っている。胸を張るような胸もないのだが…
じゃなかった。めんどくさいなあ…俺が何も出来ずたちずくして
いると、

俺に救世主が来てくれた。

「最上加奈！ 早く自分のクラスに帰りなさい！」

そこで俺の救世主……赤羽美玖が来てくれた。

「なによ！ 大和のただの幼馴染でしょ？…それとも別の理由があるのかしら…」

美玖さん？」

「べ・べつに大和が好きだから、あなたと大和が話してるのに嫉妬してるわけじゃなくて…」

「全部口に出ちゃってるわよ、美玖ちゃん」

「え！？ だから…もう！ あなたは自分のクラスに帰りなさい！」

あのお堂々と俺の名前を出して喧嘩しないでくれます？

俺への視線がレーザーのように飛んでくるんですけど！

これで何回目だよ…3回目か？

ここは俺が割って入るか…

「美玖、加奈、そんな喧嘩しないで…」

「大和は黙ってて！」

こりゃあ駄目だ…助けてえ

誰か…俺を助けてください…

しかし肝心のクラスメイトの男子共は

「あいつのどこがいいんだよ？」

「あの野郎ばつかもてやがって」

「集団暴行しようぜ」

1番最後の人…物凄く怖かったんですが！？

そこへ教室に先生が入ってきてくれた。

「おい、HR始めるぞー」

ナイス先生！俺の愛の手を差し伸べてくれ

のは先生だったんですね！

俺は先生に感謝状を送りたい位の気分になった。

…まあそこまでもないのだが。

「最上！ お前別のクラスだろう！ さっさと戻りなさい！」

「はい♪ わかりましたわ 先生♪」

あの野郎…先生の前では猫かぶりやがって…

そして最上は去っていった。

俺に平和な朝はやってこないのだろうか？

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

HRも終わり休み時間になった俺はやる事も無く

椅子に座ってぼーとしてっていると、

「大和！ お前もてもてだなあ…羨ましい！」

「そうだな…なんでお前ばかりもてるんだ？」

俺の友達の祐二とが俺に賞賛の言葉を言ってくる

そんないいことなのか？ 家に帰ってきたら…妹と姉貴地獄

学校に来たら…言っまでもないだろう

さっきの出来事だ。

「そんないいものでもないよ…ただ疲れるだけ…」

「もてる奴は皆そういうんだよ…大和…」

祐二「出来ればお前の生活になりたいよ

一回俺と立場が逆になれば俺の

気持ちも理解できるだろう。

祐二には普通の彼女がいる。

彼女もいるのにそんな事いって

いいのか…祐二…

俺はため息半分で席に座っていると、

次の授業の先生が来て、授業が始まった。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

今日も疲れたな…

今は学校の帰り道で一人でとぼとぼ歩いている。

なぜ一人かって？

理由は単純…疲れたから…

朝での出来事の後も

掃除、昼休み、弁当の時間

なども加奈と美玖に時間を奪われたからだ…

ヤンデレのほうが加奈で、ツンデレ的な方が美玖ね。

まだ説明してなかったから簡潔に説明しておこう。

俺に私と付き合いなさいといったやつは、

最上加奈、理事長の娘で超お金持ち

すごく可愛いのと男子共は言うのだが…

俺には自主中心的な奴にしかイメージないけど…

で、加奈に突っかかってきたのは、赤羽美玖。

俺の幼馴染で、容姿端麗、成績優秀の

俺とは正反対でとても美人なんだ！

…重要な事なので二回いったからね…

加奈と美玖は俺の普通の友達だ。

でも見る限り加奈の方は普通じゃないけど…

と、そんなわけで俺は公園に到着した。

なんで公園にいるかつて？

だって帰ったら姉と妹いるから…帰りたくない。

俺は部活に入ってる訳でもないので、

公園で読書して暗くなったら帰る。

そんな毎日を過ごしている。

さて今日図書室で借りてきた本でも読もう！

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

「起きてください！ あのおんなな所で寝ていたら駄目ですよ！」

目を開けたら、そこには女の子がいた。

…それが俺と彼女…美佐との出会いだった…

一話【俺の普通の日常】（後書き）

前書きと同じように

表現がおかしいところがあれば

コメントいれてくれると嬉しいです

二話【転校生はあの子!?!】(前書き)

お気に入り登録が2件きていました

ありがとうございます。

是非名前を教えてください

お願いします。

二話【転校生はあの子!？】

俺は目を開けると女の子が立っていた。

俺が読書に夢中になるあまり寝てしまったようだ。

俺が起きたら彼女は優しい声で言った。

「そんな所で寝ていたら風邪引きますよ…もう暗いですし…」

たしかに…俺は眠ってしまったのか…

「えーと…君は誰だい？」

「はい、私は橘美佐と言います。今日引越してきたばかりなので、

よろしくおねがいします」

礼儀正しい子だな…しかも可愛いし…

「なんで引越してきたんだ？親の都合？」

「いや…違うんですけど…」

彼女はそれっきり黙ってしまい何も話さなかった。

俺はこの空気がやばいと思ったので、

「じゃ…じゃあ俺は帰るんで…」

「はい…また会えるといいですね」

「そうですね」

俺は彼女に手を振りながら

俺は公園を後にした。

俺まづい事でもいったのかな？

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

「ただいまー」

俺は妹と姉に聞こえないような

消え入る声で家の中に入る。

よし！ 気づかれてない！

これはチャンス！

俺が足跡を立てずに俺の部屋に入った。

……ふう

「なんで俺の部屋にいるんだ？夕菜、そして百合華……」

俺の部屋は物で散乱していた。

今の状況を例えるならば…

空き巣に入られた後みたいな光景である。

「百合華、夕菜…一体俺の部屋で何やってるんだ？」

「いやいや私達はねえお兄ちゃんの部屋を漁って…」

「いや！ なんでもないぞ！ 大和！ 気のせいだ」

もう夕菜が言葉に出しました…

「とりあえず出て行ってもらえますか？」

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

てな訳で俺の家族についてお話しておこう。

家族は俺、夕菜、百合華、父さん、母さんの四人家族である。

俺は母さんとは血が繋がっていない。

俺の本当の父さんは、俺が産まれて二年後に死んでしまったらしい。

だから俺は百合華と夕菜と父さんとは血が繋がっていない。

最初この家に来るときは、受け入れてもらえないと思っていたのだが、

百合華と夕菜は俺に優しくしてくれた。父さんは、俺に好きな物があれば買ってくれたし

百合華と夕菜も積極的に俺と仲良くなろうとしてくれた。

今は百合華と夕菜も本当の兄弟として思える。

今は少しブラコン気味な二人だけど…

そんな事を考えていると、廊下から夕菜の声が聞こえる。

「お兄ちゃんーご飯だよー」

俺も腹減ったし食べに行くか！

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

俺は夕食を食べ終わり、自分の部屋に戻ってきて

あの女の子の事を考えていた。

あの女の子の名前聞いとくの忘れてたな…

またあの公園にいけば会えるかな？

お礼もいつてなかったから

次に会ったらお礼をちゃんといおう！

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

やばい！ また遅刻だ！

二日連続でピンチだ！

母さんがあわてて、

「大和！ ご飯食べないの？」

「今それ所じゃない！」

俺は荒々しく階段を下りて

急いで靴を履いて、

トップスピードで玄関を出ようとした瞬間

なんかにぶつかった…

昨日にもこんな事なかったっけ？

ぶつかったのは…俺の幼馴染の赤羽美玖だった…

「美玖！ お前俺の事待ってたのか？」

「ち．．．違うわよ！ 別に大和を待ってたわけじゃないんだから！」

俺の玄関の前まで来てよく言うよ．．．しかも遅刻ぎりぎりだし．．．

「美玖！ 学校までダッシュするぞ！」

「わかった！」

俺は再び学校へダッシュしていった．．．

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

ふうふう．．．やっと俺の夢の楽園

教室に着いたぞ！ これで安心だ．．．

教室の中には全員いるじゃないか．．．

俺と美玖が最後のようだな．．．

あれ？ 先生の隣にいるあの子は．．．

．．．そう先生の隣にいたのは昨日公園で出会った橘美佐だった

から
-
-
-
-

二話【転校生はあの子！？】（後書き）

展開が早かったでしょうか？

最後まで読んでくれてありがとうございます

感想・アドバイスがあればよろしくおねがいします

三話【私は転校生】（前書き）

今回は美佐視点です。

三話【私は転校生】

「美佐、着いたわよ」

お母さんが私の体を揺する。

「う…ここが新しい家なんだ…」

私は嬉しいような悲しいような気持ちに

襲われた。今回で何回目の転勤なのだろう…

お父さんは、教師の仕事をしているため

転勤が激しく、引っ越す事にもう慣れてきた。

私の父はもうこの地区の高校で働いていて

教師をやっているため、もうこの家に住んでいる。

また私はあの決まり文句を皆に言われる事になるのか…

絶対どこの高校にいつても聞かれる事がある。

「橘先生、あなたの父親なの？」

私はこの言葉が嫌いだ…たぶん、

今までで二番目くらいに呼ばれたくない。

この受け答えはめんどくさいし
とても恥ずかしくなるからだ。

はあ…また言われるんだろうな…

私は今日からここに住む事になる。

どこにでもある…ありふれた家だ。

「じゃあ、お母さんちよっところら辺散歩してくるね」

私は下見に必ず地域は歩くようにしている。

早めに覚えておきたいからね。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

私は歩いていけると公園を見つけた。

へえ…ここら辺って公園あるんだ。

前に住んでた所は公園なんてなかったから

見に行ってみようっとう

私が公園の敷地内に入って行くと

ベンチで寝ている男の子を見つけた。

顔はすらりとして、スタイルもいい。

スタイルってそっちの意味じゃないからね。

ここは起こしたほうがいいよね？

「起きてください！ あのおんな所で寝ていたら駄目ですよ！」

ちょっと上から目線の態度だったかな？

彼は目を覚ました。すごいカッコいいな…

彼はいきなりはなしかけられて

何を口にしていいか困っているようだった。

「そんな所で寝ていると風邪引きますよ」

私は丁寧口調で笑顔で言った…と思う。

彼は言葉を見つけたかのように私に言った。

「えーと…君は誰だい？」

「私の名前は橘亜美と言います。今日引っ越してきたばかりなので
よろしくおねがいします。」

自己紹介は慣れてるんだ。また明日学校に転入する時

いう事になるからね。そしたら彼は、

「なんで引っ越して来たの？親の都合？」

「いや…違うんですけど…」

本当は彼の言っていることはあっているのだが

咄嗟に私は嘘をついてしまった。

そして私は無愛想に言ってしまったため

気まずい時間が流れる。

「じゃ…じゃあ俺帰るんで…」

「はい…また会えるといいですね」

「そうですね」

そして彼は手を振りながら公園から出て行ってしまった。

そつえば…名前聞いてなかったな…

また彼公園に来るかも知れないし

その時に聞いてみよう。

・ ・ ・ 今度といわず明日にすぐ会うことも知らずに ・ ・ ・

三話【私は転校生】（後書き）

お気に入り登録5件になりました

ありがとうございます。

頑張って面白い作品を作れるように頑張っていきます

四話【meet again!】(前書き)

美佐視点です。

四話【meet again!】

「ただいまー」

私は暗くなってきたため、家に帰ってきた。

「おかえりーもう夕食できてるわよ」

もう家具とかは全部家の中なのか…

お母さんは手際がいいな…

私が台所に行くと、お父さんも居た。

「お父さん、どうしたの？今日早いね」

いつもは教師をやっているため、この時間に帰ってくることは少ないのに。

「今日は仕事も早く切りあがったからな、久しぶりに

母さんの料理が出来たてで食べられるぞ」

父さんはいつもは帰って来る事が遅いため

お母さんにいつも作り置きにして

レンジで暖めて食べている。

それだけ教師という仕事は大変なんだな…

そんな事を考えていると、

「ごめんな…また友達と別れさせるような事をしてしまつて…」

お父さんは、別に悪くないのに。

教師の仕事をしている以上

そんな事は仕方ないのだ。

私はそう考えるようにしてるから。

「いいよ別に…お父さんがあやまらなくても」

私は大人の都合というものも最近分かってきたので

子供のようにお父さんの事は責めない。

「そうか…明日は俺の担任だからな…明日の荷物はちゃんと仕舞つておくんだぞ」

はいはい…昨日中にやりましたよ…

そして私はその場から立ち去り自分の部屋に戻った。



まだ私の部屋は、ダンボールの山で、
どのダンボールの中に何が入っているか
さっぱりわからない。

何度やっても大変だな…引越して。

ダンボールの中からあれが出てきた。

それは大事なものが詰まっている箱。

それは…私の大切な物…

それを大事に

私は涙を堪えながら、机の中に首に付けた。

今はもういないあの人もらったもの。

いけない！ あの人の事はもう忘れようとしてるのに！

何でだろう？ 答えてよ…慎吾…

私は声を殺し泣き始めた。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

私はそれっきり食事も喉を通らずに

睡眠もあんま取れず朝になってしまった。

今日から学校なのにテンションは高めで行こう！

私は台所へ向かうとお母さんがいた。

お父さんはもう学校だろう。

「美佐今日から学校だけど、頑張ってね」

「うんっありがとう、お母さん」

まあ今回も普通にしていれば友達も出来るだろう。

私は朝食を済まして、学校へと向かった。

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

今私は二年二組・・・私のこれから

学校生活を過ごすであろう

教室の前にいる。

いつになっても緊張するなあ

そして私のお父さん――橘先生

に呼ばれて私は、教室の中に入る。

私が入った瞬間、教室でざわめきが起きる。

「今日から私の娘の美佐がこのクラスで

生活することになった。皆よろしくたのむな」

そしてクラスはまた一段といえる歓声が巻き起こった。

そしてこのクラスの一人の男子が大声で、

「先生の隠し子ですかあ？」

といって完全にクラスの中がしーんとなってしまった。

空気読めないんだな…きつと…

すると廊下を思いっきり

走る音が聞こえる。

だんだんこっちの方に向かってきて、

私の教室の前で音が無くなり

そして彼は入ってきた。

そして私は吃驚する。

- - - だって彼は昨日公園で会った子だったのだから... - - -

四話【meet again!】（後書き）

ちょっと読みにくいかもしれませんが許してください。

え？ かなり？ 暖かく見守ってください。【笑】

五話【大和と美佐】（前書き）

出来れば感想を書いてくれると嬉しいです。

書いてくれれば励みになりますのでよろしくおねがいします。

大和視点です。

五話【大和と美佐】

俺は今教室の中で、硬直状態になっている。

なぜかって？　だつてだつて…

昨日、公園で会った女の子がいるから。

俺と同じ学年だったのか…

「あ…昨日の方ですね」

俺ではなく彼女が俺より先に言ってきた。

「そうですねーあはは…」

俺は乾いた笑いでそう言った。

「おつ劉蜂！　俺の娘と知り合いか！」

え！　しかも娘なの！　すごいな…

学校で聞いたことある苗字だとは思っただけど、

まさか俺の担任の娘なんてな…

Wビックリだぜ…

そんな事を考えていると先生が、

「じゃあ美佐は劉蜂の隣の席な」

「うん…わかった…」

という事で、美佐さんは、俺の隣に席に座る事になったのだった。

五話【大和と美佐】（後書き）

今回は短くてすいません。

明日はテストなので

このくらいです。

後、5000PV突破しました。

ありがとうございます。

これからも頑張って生きたいです。

六話【運命か…それとも必然か…】（前書き）

大和視点です^^

六話【運命か…それとも必然か…】

そんなわけで俺と美佐さんは隣席同士となった。

前の席の美玖の視線が痛いのは気のせいかな？

…ていうか睨んできてるけど…

ちなみに美玖は幼馴染の奴だからね…

忘れた人の為にいつといたんで。

「今日から娘の美佐がこの学校に世話になるからよろしくな」

先生が笑ってそういったが、絶対娘には手をだすな的なオーラが出ている。

「じゃあ朝のホームルームは終わりだ」

先生がそういつて教室から出て行くとき、

早速…いや必然ともいつていいだろう…

クラスメイトの奴等が美佐さんに群がっている。

美佐さんは困ったような表情を浮かべていたが、

これは転校生の務めともいわれるんだ…

「どこから来たの？」

「何で転校してきたの？」

「橘先生の娘なんでしょ？」

「彼氏いる？」

…質問ラッシュだ…

俺が苦笑いともとれない表情を浮かべながら見ていると、

「大和…あの子と知り合いなの…？」

美玖が不機嫌な様子で俺に言ってきた。

「ああ…ちよつとあつてな…」

「ちよつとつてなによ！ 教えなさいよ！」

美玖の顔が段々顔が怖くなってきたのは気のせいかな？

「美玖は大和と美佐ちゃんがくつつくのが嫌なんだよねー」

ここで俺の友達…いや親友の祐二が美佐に突っかかってきた。

「だから！ 別に大和の事なんかミジンコよりも興味ないわよ！」

ミジンコ！？ 俺ミジンコより興味がないの？

「あーら（笑）図星だったのね…おほほほ（笑）じゃあ私は失礼するザマス」

祐二は美佐を冷やかして教室からダッシュでいなくなってしまった。

「さて！ 絶対あんた殺す！」

美佐が祐二を追いかけけるように教室から出て行ってしまった。

美玖は何が気に入らなかったんだ？

朝から元気だな…あの二人…

で、美佐さんはどうなったんだ…

！ 美佐さんはやっとクラスメイトの質問の嵐…

いやトルネードから開放されて疲れた表情をしている。

「始めまして…といっても昨日会ってるか…」

「そうだねーこれって運命かもしれないね」

運命か…たしかにそうかもしれないな…

「いや必然だったのかもよ（笑）」

「ふふっ たしかにそうかもしれないね」

おっ 結構話してて楽しいな…気があうかも。

「そつえば君の名前はなんていうの？」

「ん？ 俺は劉蜂大和！ 大和って呼んでくれ！」

「わかった！ よろしくね 大和君！」

「じゃあ俺はなんていえばいいんだ？」

「私の事は美佐って呼んで！」

「わかった… よろしくな美佐！」

そんな訳で俺と美佐さん… いや美佐と俺との

時間が始まった…

六話【運命か…それとも必然か…】（後書き）

お気に入り登録が10件突破したぜ！ いえい！

今度は1万PV突破するために奮闘したいと思います。

感想はいつでも待ってます！

七話【加奈の気持ち】（前書き）

今回は一話以降登場しなかった

加奈視点です。

七話【加奈の気持ち】

放課後になってもやっぱり駄目だ。

私は三日間、我慢していた。

私が劉蜂大和から離れて

思ったことは一つ

ただただ胸の奥が

苦しかった。

私はもうあいつしか

頭に入らなくなってしまった。

.....

あいつに助けられて以来

私はあいつの優しい部分に

惚れてしまった。

でも私は、あいつとは

普通に接する事が出来ない

でも、今日は.....会いに行く

私は扉を力強く開く

「劉蜂大和！ 今日こそは・・・」

「美佐・・・一緒に帰ろうぜ」

「え？ 誰か呼んでるけど・・・」

「ああ・・・いいんだ、別に・・・気にしなくて」

私の事気にしてよ！ しかもあの隣にいる子誰？

「その隣にいる子誰？」

「えーと・・・今日からここに転校してきた橘先生の娘なんだ」

「橘美佐って言うの。よろしくね」

ちょっと待って！ これフラグ立ってるんじゃないの？

転校生でもう一緒に帰る関係

・・・絶対やばい、恋愛関係になったらこっちが困る。

「で、何の用なんだ？」

「別に何のようもないけど・・・」

「じゃあ美佐、帰ろうぜ」

やばい……ここは何でもいいから嘘を

「いや……本当は用があつて来たのよ!」

「ん? 何だ? 用つて?」

あ……どうしよう……そんなの……

「明日休日だからどこかに行かない?」

私言っちゃったよ! 断られるに決まってるのに……

「え? そうだな、いいかも知れないな」

え? え? え? いいの!?

嬉しい!

「美玖と祐二も誘つてな」

皆じゃなくて二人で良かったのに……

まあ一緒に同じ事出来るからいいけどね」

「美佐も来るよな」

「うんっ私もいいの?」

「まあ歓迎会も込めてな」

「私嬉しい！ 楽しみにしてるね」

この女も来るのか…

赤羽美玖さんに続いて

橘美佐か…

絶対あの二人なんかには負けないんだから！

七話【加奈の気持ち】（後書き）

感想がまだ1件も来ていないです

悲しいので誰か感想をー

八話【女心】（前書き）

大和視点です

八話【女心】

俺は加奈と話し終わって校門を出ると

美玖がいた。

「あれ？ 美玖お前先に帰ってるんじゃないのか？ それとも俺を待つてくれたとか？」

「いや別に大和を待つてた訳じゃなかったんだけど！」

そんなカリカリすんなって… 太るぞ…

まあそんな事はいえないのだが…

「あつ美玖、明日用ある？」

「あ… あしたは大丈夫だけど…」

あ… 美玖は明日あれがあつたか…

「明日、加奈の家で美佐がこの学校にきたから歓迎会するんだけど… 行くか？」

「OK… 加奈の家ね…」

加奈の部分に殺意が込められていたのは気のせいだろうか？

「後公園で待ち合わせな」

「なんで？ 直で加奈の家に行けばいいんじゃない？」

「いや…美佐が加奈の家がわからないっていうからさ」

「…そういえばさ、なんであの子の事知ってるの？」

「ああ…ちよつとあつてな…」

「ああそう、私には教えられないのね…もついい」

加奈は歩くスピードを上げて俺から離れようとする。

「おい！ ちよつとま…」

俺もスピードを上げて美玖に追いつこうとするが、

「ついてこないで！ 後明日私は加奈の家に直でいくから！」

加奈は不機嫌になって

俺の先を走って行ってしまった。

俺なんか悪い事いったか？

「ただいま…」

はあ…美玖の事怒らせちゃったな…

なんで怒ったんだろう？

こういうときには、

女のあの二人に聞いてみるか…

気が進まないけど。

俺は姉の百合華の部屋を開けた。

「百合華！ ちょっと相談が…って夕菜もいるのか…」

「え？ まさかお姉ちゃんと…？」

「変な想像をするな」

「で、なんだ？ 私に相談したい事があるっていつのは？」

俺は今までのいきさつを全て百合華に話した。

「……………」

「…お兄ちゃん、乙女心が全然わかってないね」

え？ 夕菜までに見放された。

やっぱそこまでひどい事したのかな？

「大和は悪い事は言っていないが言っているぞ」

どういう意味だよ…

「もてる男はつらいねーお兄ちゃん」

あー頭遺体じゃなくて頭痛い

明日は謝っておくか。

「じゃあ夕菜も歓迎会行くー」

「そうだな…なんか楽しそうだからな」

フタリトモナニッテルノカナ？

「もう一回聞くが君達はなんていったんだ？」

うん。俺の聞き間違いだ。俺の耳が壊れてしまったに違いない。

「だからー お兄ちゃんの歓迎会に行くー」

「私も夕菜も行くから」

いやいやいや…駄目でしょ！

「無理」

「分かったじゃあ偽名使うから」

そんな犯罪者じゃあるまいし…

「そついう問題じゃ…」

俺が言い終わる前に夕菜が、

「お兄ちゃん 私達明日の服とか着替えるから出て行ってね」

「だから俺がお前達を連れて行くとは一度も言っていない…」

俺が言っているにも関わらず俺は部屋の外に

追い出されてしまった。

明日はどうなるんだ？

先が思いやられる…

そう思いながら俺の部屋に戻る俺だった…

八話【女心】（後書き）

なんかすごい展開になってますね

自分でもワクワクしてます（笑）

感想・評価ポイントはいつでもまっていますb

九話【大和の過去／回想編】（前書き）

こんにちわー（こんばんわかもしれません…）

五月雨 ♪ ですー

お気に入り登録が16件となり

作者はビックリして倒れそうです

→

嘘ですが・・・（笑）

感想はいつでも待ってます。

しつこくてすいません。

今回は美玖視点です。

九話【大和の過去／回想編】

大和が部屋に戻る頃もう一つの部屋では…

「なんで私はああなのかなー…」

私はどうしても大和の前じゃ素直になれない…

私は大和に困らせるような事をしてしまった。

美佐っていう人だってどっかで

会った他人なのに…

明日の歓迎会だって、

本当は楽しい物にしたいけど…

大和起こってるだろうなー…

私は大和を笑わせたい。

………

あの時の表情にしたいくないから…

…少し大和と私について昔話をしよう

私と大和が出会ったのは、小三の時、

家が隣同士でもあつて

私と大和はよく会うことがあつた。

「美玖ちゃんって言うの？ 僕の名前はね大和っていうんだ！

大和っていうのは大きいって言う字に昭和の和だよ！」

私はその時人見知りの性格もあつて

友達も少なかった。

大和は根気よく私に話しかけてくれた。

そして私に言ってくれた。

「僕と美玖ちゃんは友達だよ！」

私はそのときから大和に惹かれ初めていたのかもしれない。

仲良くなった私達はいつでも一緒に行動していた。

あの事件が起こるまで……

-
-
- 中三の夏大和のお母さんが死んだ
-
-
-

九話【大和の過去〜回想編〜】（後書き）

次回は大和の

悲しい過去について語られます。

十話【大和の過去々回想編々】（前書き）

今回も美玖視点です。

十話【大和の過去へ回想編へ】

中三の夏のあの日に大和のお母さんが死んだ。

あの時の私達はすごい楽しく過ごしていただろう。

でもこの出来事が起こってから

大和は変わった。

それは、夏休みが一週間に迫った

あの日にさかのぼる。

[illegible]

「大和！一緒に帰ろ！」

私は大和と一緒に帰るのが楽しみでたまらなかった。

「そうだな！一緒に帰るか」

大和は優しい。私が小さい頃から

大和は私の我が侘を聞いてくれる。

私はそんな大和が大好きだ。

「美玖… お前俺と帰って楽しいか？」

「うんつまあ普通だけど…」

私のバカ！ ここ位強情にならなくていいでしょ！

「そうか… 美玖、今週の日曜日さ一緒にいかないか？」

え？ 大和が私とデートしてくれるの？

やばい！ 大和が私と…

「駄目か？」

「べべべべつに、大和と一緒に行きたいんだったら別に行ってあげてもいいけど！」

「そうか！ じゃあまた明日な！」

大和は私にニコツと笑い

先走りして先へ行ってしまった。

頭が沸点に達してやばいよ！

絶対今、顔が赤くなってるよー

今週の日曜日が楽しみだな。

- - - ここから私にとって大和の笑顔をみた最後だったのかもしれない - - -

十一話【大和の過去／回想編】（前書き）

今回はかなり長いです。

十一話【大和の過去／回想編】

次の日私は大和の家の前で待っていたのだが、

大和は一向に出てくる気配が無いため

私は仕方なく学校へ向かうとした。

今日はどうしたんだろうな？

- - - このときの私は大和の一大事に気づいてあげられなかった
んだけど - - -

私は一人で教室にはいると

大和の親友の祐二が

私に話しかけてきた。

「あれ？ 赤羽、大和と一緒に来てないの？」

「うるさいわねっ 大和は来てないわよっ」

つい荒い声を出してしまう。

「…ははーん大和と一緒に来れなかったから機嫌悪いんだね…」

私は本当の事を言われ頭にきて、

「うるさい！ このバカ！」

「ああ怖い怖い！ 美玖ちゃんのお怒りだ〜」

そして祐二は私から逃げていった。

全然反省してないな…

それにしても…

大和まだ来てないな…

寝坊でもしたのかな？

ガラガラガラ…

「おーい皆席につけー」

そして先生が入ってきてしまう。

今は大和の事を考えていたのに

先生邪魔しないでよ…

「先生ー劉蜂が来てないですよー」

「そうだったな…今日は皆に劉蜂について話があったんだ…」

大和の事？ 一体なんだろう？

「…劉蜂のお母さんが亡くなったそうだ…」

先生の言葉に教室の雰囲気が

一気に下がる。誰も口を開けようとし無い…

私も先生の言葉を疑った。

大和のお母さんが死んだ？

だって昨日まで生きてたんでしょ？

なんで今日…意味が分からないよ…

私は段々胸が苦しかった。

呼吸もすることも嫌に

なってきた。

大和は、お母さんの事、好きだったのに…

なんでなんで？

…その後も授業は合ったがクラスメイトの誰一人として口を開けるものはいなかった。

大和はこのクラスで人気者だった。

困っている人がいれば

助けてあげたし、

大和が困っていれば

皆が大和を助ける。

大和はこのクラスで皆に好かれている

人気者だった。

その大和に降りかかった悲しみを

誰一人助けることが出来ない。

もちろん…幼馴染の私でさえも…

そして私は次の日を迎える。

私は、大和の家の静けさに気づく。

大和…今日は休みだろうな…

昨日あんな事があつたんだ。

来れない・・・よね

私は一人で歩く孤独感を

背負い学校への道のりを進んでいった。

私が席に座って、

何もしないで待っていると、

「おはよー」

私は教室の入り口を見ると、

元気に笑顔で

挨拶をしている

- - - 大和がいた - - -

一瞬だが、教室は静まり返ったが、

皆は大和に「おはよう」

とか普通に声をかけている。

大和は私の方に来て、

「よつ美玖！ 昨日はごめんな！」

大和？ 元気なの？

なんで？

なんで？

大和にとって…

お母さんは、

大事じゃなかったの？

「大和…」

私は小さな声で言った。

「ん？　なんだ美玖？」

私はおもいつきり

大和の頬をはたいた。

「大和はお母さんが死んで悲しくないの！　この薄情物！」

私がもう一回はたこうとすると、

誰かが私の手を止めた

祐二だった。

「やめなよー美玖ーはたいたら大和も痛いでしょー」

「放して！」

私は祐二の手を払いのけようとする。

「…ふざけんじゃねーよ！」

祐二の顔はさっきの軽い顔

ではなく本気の顔になっていた。

「大和はな…お前に心配をかけたくな…」

「いいんだ祐二…俺が悪かったんだよ」

大和は苦笑いを浮かべて

祐二に言った。

「ごめん…俺今日帰る…ごめんな…美玖」

大和は力の無い表情を浮かべて

教室から出て行ってしまった。

大和は教室から出て行ってしまった。

私…大和の事わからないよ…

十一話【大和の過去／回想編】（後書き）

揺れる美玖の想い…

次で回想編は終了です。

十二話「大和の過去〜回想編〜」

大和の考えていることが理解できない。

結局この日も授業に集中出来ず

大和の事ばかり考えて終わってしまった。

大和がいなくなってから

祐二は、私の事を無視している。

大和…あなたは一体

何を考えているの？

私はまた一人でも下校の道

を歩いている。

いつもは大和と一緒に

帰るから楽しかったのに

一人だと悲しいな…

すると私の目に公園が

目に付く。

小さい頃は

大和のお母さんと

大和と私で遊んだな…

すると、

私は、

一人の男の子が、

ベンチにぼつんと

座っている

男の子を見つける。

- - - 大和だった。

私は大和の姿を見て今まで考えていたことを愚かに感じた。

大和は泣いていた。

耳を覆いたくなるような

声で、大和はこの一言を

ただひたすら呟いている。

「母さんさ…俺は駄目な奴だな…」

大和は誰かに答えを求めるようにして

言っている。

「俺には母さんの死を受け止めるにはまだ若いよ…だってさあ俺

まだ十四年しか生きてないんだぜ…ハハハ…」

大和の空気の笑いが私と大和しかない

公園に虚しく響く。

もう…やめてよ…大和…

「母さん…この公園は変わってないよ…俺と美玖と一緒に遊んだ公園

俺の思い出はまだ何一つ変わってないよ…」

私は大和の一言一言を聞き逃さないように聞いていた。

「母さん…俺母さんを忘れないよ！そして俺はもつと強くなる！

母さんが残してくれた思い出は絶対！俺の胸の中に焼き付けとくからさ！」

私は声を殺して泣いた。

大和の本心に気づいて

あげられなかった事を

私は…私は…

私がある場で泣いていると、

大和がこちらの方に歩いてくる。

やばい逃げなきゃ…

そう思ったときに

大和と私は会ってしまったのだった。

私を見たとき大和は吃驚した表情を浮かべていたが

大和は、私に

「何でここにいるんだ？…美玖」

そういつて大和は私のもとから去っていった。

謝らないといけないのは私の方なのに

なんで大和が謝るの？

謝らなければいけないのは私の方なのに…

大和は優しすぎる。だから

クラスメイトに、そして私に

心配をかけないようにしたんだろう。

公園じゃなくて私の目の前で泣いてよ…

私は気付いてしまった。

大和は――私の事をただの幼馴染程度にしか感じていないことに…

だから私は大和の一つでもいいから大和の柱になりたい。

そして、

私は、

決めた。

大和の悲しみを一緒に背負えるような人になる！

だって、

私は、

私は大和が好きだから
-
-
-
-

[illegible]

あの日の夏の日から私は何一つ変わっていない。

大和は次の日から私に普通に接する

ようになっ
たけど、

しかし大和は私と一つの距離をおいてるような気がする。

今まで、今まで大和の泣いている姿を私は見たことが無い。

――そして、本当に笑っている姿も――

私はあの事を謝らないでいる。

私は謝らないといけない。

だから

遅いかもしれないけど…

-
-
-
- 私 は 明日 大和 に 謝 ろ う と 思 う
-
-
-
-

十二話【大和の過去〜回想編〜】（後書き）

美玖の決意！

さあ波乱の美佐の歓迎会はどうなるのか！？

次回に続きます

十三話【歓迎会へ出発!】（前書き）

十三話投稿する前に

サーバー落ちしました…

憂鬱です

こんな僕に感想を————（笑）

→

感想目当てかい！

最初は大和視点

途中から美佐視点でどうぞ！

十三話【歓迎会へ出発！】

今日は美佐の歓迎会当日

今日は祐二の彼女にも会える。

俺はまだ祐二の彼女に会った事

がない。

祐二の彼女に俺は出会った事が無い

なぜ今日祐二の彼女に会えるかって？

昨日祐二に

『明日美佐の歓迎会を加奈の家でやるんだけど…祐二来れるか？』

とメールした所、

『わかった！ 今一緒に彼女もいるんだけど、

連れて行つていいか？』

という事になり、俺はOKという事を

祐二にメールを伝えて

祐二の彼女も来るという事だ。

しかし…それはいいとして

俺には一つ憂鬱がある。

夕菜と百合華と一緒に来るという事だ。

是非こいつら二人には、

騒ぎをおこしてほしくない…

俺は思っている。

「わーい 夕菜歓迎会楽しみだなー」

…夕菜の歓迎会じゃないぞ…美佐の歓迎会だからな…

「今日はあばれまくろうつと」

百合華！ 頼むからやめてくれ！

ああ…この先どうなるんだ！

そして俺は思い足を引きずりながら

美佐と待ち合わせている

若葉公園へ向かった。

<美佐視点>

私は今日

学校では、橘先生

家ではお父さんに

今日歓迎会あるんだ

という事を伝えると

即OKという

返事が返ってきた。

しかも今日は帰ってこなくてもいいぞ！

とまで言っていた。

それは教師として

どうかと思うけど…

それで私は今

大和君に初めて出会った

若葉公園にいる。

五分位待つと

誰かがこっちに歩いてくる。

大和君だ…

ん？ 後ろに二人いるけど…誰だろう？

「大和君、後ろにいる二人は？」

私が大和君に尋ねると

「ああ…えーと…俺の友達なんだ…」

「私は姫野百合華！ 大和から話は聞いてるよ

美佐ちゃんだっけ？ よろしくな！」

おおなんか親分肌みたいな人だな…

偏見かも知れないけど…強そう…

「えーと私の名前は…劉ば…山田夕菜って言うの！ よろしくね」

なんか言い換えなかった？

「と、とりあえず…もういこうぜ！ 自己紹介も済んだからな！」

いやまだ私の自己紹介が終わってないんですけど！

それを言う前に私達は会場に出発した。

…今日私達はどうしてもない一日を体験する事になる。…

十三話【歓迎会へ出発!】（後書き）

次は番外編を書こうと思います

書かないかもしれませんが

それはそのときの気分次第で（笑）

特別編【作者with 登場人物talk】（前書き）

今回は特別編です。

しかも楽屋ネタなので

読めなくても大丈夫なので

読み飛ばしてもOKです。

特別編【作者with 登場人物talk】

大和『ちゃーす！ まあ今回は特別編と言うことで適当に

やらせて頂きますんでそこんところよー！』

美佐『しかも何と前文全て会話文という

完全に作者の好奇心によって生まれた特別編なんですよー』

美玖『いくらなんでも手抜きしすぎでしょ！

これじゃ背景も私たちの思っている事も

読者にわからないじゃない！ …作者つてもしかしなくても馬鹿でしょ』

加奈『器が小さいのねー赤羽さん…まあ最初から分かった事だけど…』

美玖『なんですってー！ あなたなんて馬鹿と加奈でバカナよバ・カ・ナ！』

作者『まあまあ二人とも落ちついて…』

大和『そうだ！ 二人共馬鹿という事で解決しよう！』

作者『うんうん、それがいい』

．．．．．

全員『『作者出てきたーーーー！』』

美佐『いくらなんでも番外編だからって出てきていいんですか！？』

作者『え？ だって出て来たったからいいじゃん！』

美玖『なんていい加減な作者なの…』

大和『そのいい加減差には俺も飽きれて何も言えないぜ』

作者『いつてるじゃん（笑）』

大和『うるせーこの、馬鹿作者!』

作者『そんな訳でこの作品も終わりを迎える事になりました…』

大和『あ、ごめんごめん作者許してくれ!』

作者『冗談はさておき…この作品もユニークアクセス3000人PVは2万を超えるなど

とんでもない事になっております』

加奈『それは私のおかげでもあるよね! 作者』

作者『…………お気に入りか20件突破して

皆様の期待に添えるか心配ですが読者の

皆様が『面白い!』と思えるような

作品を作ろうと

心がけていきますのでよろしく願いします！』

大和『頑張れよ！ 作者』

作者『あつこのコーナーまたやるから（笑）

全員『『またやるの！？』』』

作者『また次回の特別編をお楽しみ』

大和『…読者の皆さんは誰も楽しみにしてないけどな』

特別編【作者with 登場人物talk】（後書き）

夕菜、祐二、百合華は

また今度の特別編の時に

出したいなと思っています

十四話【門番よ！永遠に！】（前書き）

昨日は放置してしまいました。

昨日は小説を読んできました（笑）

…ネタが無かった訳ではないです！

じゃあ大和視点でどうぞ！

十四話【門番よ！永遠に！】

俺は百合華と夕菜がいるせいで

歩いた心地という物がしなかったが、

加奈の家に無事到着した。

…いつ見ても加奈の家は

大きいな…

例えるならば、俺の家は鳥籠

見たいな物だ。

…情けないけど…

そして俺は門の外にいる

門番の二人いる中で一人に声をかけた。

「あのお劉蜂大和と橘美佐という者なのですが、入っても大丈夫で
しょうか？」

「美佐様と大和様ですね…かしこまりました」

…いつ見ても怖い顔だな…

「怖くて申し訳ございません」

…ああそうだった…読心術使えるんだよな…

「じゃあ逝くか！ 大和！」

行くかだろ！ こえーよ！

「お兄ちゃん 逝こっ
っ」

もう突っ込まないぞ…

百合華と夕菜達は

門の中に入って行こうとするが、

門番の人にストップを掛けられる。

「あなた達は加奈様から伺っていませんので入れません」

…あつ加奈に夕菜と百合華が来るのと言ってなかった。

「門番さん 私達を入れるよねっ」

そういったのは夕菜ではなく百合華だ。

…顔が笑っているが目がやばい！

「……はい……わかりました。入っても大丈夫ですよ。もちろん夕菜様も」

「わあい やったあ夕菜も入れるんだね♪」

…門番の人はたぶん殺られると思ったのだろう。

夕菜と百合華に門の中に入れる権利を

与えた。

…門番さん…あなたの決断は間違っていないですよ！

俺は門番さんに黙祷しながら

門の中に入っていった。

さあこれからが俺の事件の始まりだ。

十四話【門番よ！永遠に！】（後書き）

次回から歓迎会編の中枢に

入っていきます。

… 歓迎会編、結構長くやってますね…（笑）

サブタイトルは完全にネタ切れです・・・b

十五話「モノローグ」

私は今、私の娘の加奈の友達の

歓迎会を私の家でやる事になり

加奈に

「理事長の以心にかけても今日は素晴らしい歓迎会にしてね！」

と言っていた。

私は今日の歓迎会を素晴らしいものにしようと

人数をかなり呼び、

盛大な歓迎会：いやパーティにするつもりだ。

加奈に言われた【サプライズ】

の為にも…

今日は歓迎会当日だ。

今飾り付けの最中で

会場に向かっている。

私は会場の中に入ると、

先客がいたようだ。

「こんにちわー先客の方でしょうか？」

「……………」

私は感じが悪いと思い

その場を立ち去ろうと後ろを向いた瞬間

そいつが私の口に何かを当ててきた。

「……!？」

私は抵抗するが段々抵抗できなくなり

そして私は意識が無くなった。

十五話「モノローグ」(後書き)

これが歓迎会で大きなイベントに

なつてきます。次の投稿は

6月3日くらいです！

十六話【迫る悪…】（前書き）

自分で一日に一回投稿は無理だと判断しました。

なので、二日に一回投稿出来ればいいと思っています。

十六話【迫る悪…】

俺は玄関から入ると、そこには

加奈が立っていた。

「遅かったわね…あつ後ろにいるのは百合華さんと夕菜ちゃんじゃない！」

加奈は驚いたように言った。

「あつごめんな…どうしても夕菜と百合華が来たいっていったもんでな…」

「まあいいわ…とりあえず会場に行くわよ」

加奈に連れられ来たのは、

ものすごい大きい会場だった。

そこには、詰め掛けるように大勢の人がいた。

「おい…加奈…なんなんだ？ この大勢の人は？」

「ああどうせなら大勢の方がいいじゃない」

…それ答えになっていないような気がするぞ…

「ありがとう加奈ちゃん！ 私の為にここまでしてくれるなんて！」

美佐は笑顔ではしゃぐように言った。

…いやそうだとしてもこれはやりすぎだろ…

この会場にたぶん百人はいるぞ…

これじゃ美玖も見つからないんじゃないか？

…下手すれば祐二とその彼女さんも…

「わーい！ 美味しそうな料理がいっぱいあるよー」

「そうだな…食って食って食いまくろっ！」

ここには馬鹿妹と馬鹿姉がいるが

もう放って置こう。

相手にするとめんどくさいからな…

「美佐…ちょっと付いて来てくれるか？ 美玖探すんだけど…」

「うん！ わかった」

美佐は物分りが良くて助かるな。

「え？ 私？」

加奈は焦ったように言っている。

「お前と美玖は会ったら喧嘩するだろ…」

「ああそうね」

あつさり納得するなよ…

という訳で俺は美玖を探しに出掛けた。

「そついえば大和君！ お父さんが言ってたんだけどね」

「ああなんだ？」

「えーとね「ちゃんと宿題やれよ！ お前は成績が悪いからな」だつて」

「……………」

…俺に恥を負わせやがって

折角美佐には頭のいい同級生だと思われるようになってきたのに…

「いや最初からそんな事は思っていないよ…そんなフラグもたつてなかったじゃん」

うわっ読心術！？　なんて奴だ美佐の台詞で作者の言いたい事

を入れてきやがった…

「美佐今何ていった？」

「え？何の事？」

もう何も言つまい…

俺達は雑談しながら

美玖を探していたが

会場にはいなかった。

…おかしいな…あいつの事だからいるはずなんだけどな…

俺と美佐は仕方が無いので

会場に戻ることにした。

戻ると大変な光景を目にした。

百合華と夕菜が寝ていたのだった。

お前等！ 食いに来ただけかよ！

そんな突っ込みは俺の心の中に封じ込めた。

「加奈…ごめんな…こいつら邪魔だよな…」

「…別に邪魔とも言っていないけど」

うん、あきらかに邪魔だと思ってるな…

「そんな事より始まるわよ…」

前をみるとステージ上に人が立っていた。

「何が始まるんだ？」

「えーと予定としては…オーケストラにオペラ

とかかしらね」

うわー…そんなの最早高校生がやる歓迎会じゃないだろ…

「にしてもお父さんどこにいったのかしら？」

加奈の言うお父さんというのは

理事長の事である。

…こんな娘を持つ理事長も大変だな…

「あれ？ 理事長も来るのか？」

「まあそだね…今日の式場の自分で準備するとか張り切っちゃって」

へえ理事長も娘思いなんだな…

…悪い言い方をすれば親馬鹿…

「あーあー」

ステージ上に立っている人は、

マイクテストをやっている。

見る限り進行役の人だろう。

「ではこれから加奈様の学校に新しく転校してきた

橘美佐の歓迎会を開催したいと思います！」

進行役の言葉で

場の空気が一気に盛り上がる。

美佐は自分の名前を

呼ばれるとは思っていなかったのか

顔を赤らめている。

「さあ橘美佐！ ステージ上にあがって自己紹介をしてもらえるかな？」

「ふえっ？ 私？」

完全に戸惑い始めた美佐に俺は優しく手を押した。

「まあ気楽に言って来い」

「う、うん！ わかった…」

美佐は緊張しているのだろう。

一步一步がぎこちなく歩いて行った。

そして進行係の人と美佐が小声で何かを話している。

話が終わり何が始まるのか期待したその時だった。

進行係の人から驚きの言葉が出たのだった。

「これから始まるのは、歓迎会ではありません…」

いきなり何を言い出すんだ？

「これから始まるのは…俺たちの計画だからな！」

バンバンバンッ

俺の耳に轟音と言っていいほどの音が聞こえた。

そんな音が聞こえた時には、

数秒の刻が流れる。

「ぎゃあああああああ！」

そんな声が聞こえる。

「嘘…なんなのよ…これ？」

加奈は呆然とした声でそう言った。

今の音は…紛れも無い…

銃声だったからだ。

十七話【風雲…そして雷】

俺の目の前に広がる光景は目には悪い光景だった。

近くで倒れている女性…

そして沢山の赤い液体がびっしりと俺の目の前に広がる。

その正体が…血だったのだから。

俺が分かった事は三つ

一つ目…ここには敵がいる。

二つ目…進行係は敵でこの会場に来ている客を銃でうった。

という事だけ俺の頭の中に入ってきたのだった。

そして…顔に黒いのをつけている

三人の男…いや男じゃない可能性もある。

進行役…いや今は敵か…そいつも合わせて、四人いる。

その中の一人が大声で言った。

「オイ！　ゼンインオクジョウヘイドウシロ！」

背が一番大きい男がそう言った。

「ケイタイデンワスベテカイシュウサセテモラウ」

そう言つと全員から回収した。

その中の一人の進行役だった敵が俺の目の前にやってきた。

「ふっ残念だったな…これが歓迎会場じゃなく地獄の会場だ。」

高校生なのにお前も今日が命日なんて残念だったな…」

「ふざけないで！」

加奈は大きな声でそう言った。

「ああ理事長の娘さんは元気ですねー」

そいつはふざけたようにそう言った。

「あんた達…まさかお父さんも!？」

「あああいつの事があいつは金の為に人質にとっておいた」

こいつ…人間じゃないな…

俺は普通にこう思った。

それと同時に……俺には殺意もこみ上げてきた。

「ああ人質と言えば」

「何だよ！」

俺は会場に響き渡るよう轟音でそう言った。

「お前等の友達も人質にとってあるから」

そいつがそういう時俺の怒りは頂点に達した。

俺はそいつめがけて殴りかかろうとした。

「いいのかな」 殴って？ 君の友達殺しちゃうよ」

そいつが誰の事を言っているか分かった。

そいつが言っている人質と言うのは…

美玖達の事だろう。

十七話【風雲…そして雷】（後書き）

人質にとられた美玖！

さあどうなる十八話！

ちなみにサブタイトルは完全に

ネタ切れです。

次回を期待しててください。

十八話【決意…】

俺は果てしない無力感に襲われていた。

俺は美玖を救う事が出来ない悲しさ。

考えるだけでむしゃくしゃしたが、

今の俺は美玖達を助ける事も出来ない。

「オイ！ ココニイルヤツラ！ スベテオクジョウヘアツマレ！」

俺達は一列に並ばされて、

一人の奴が先頭に付く

中間地点にはもう一人銃を持っている奴がいる。

そして一番後ろにも一人いる。

…逃げ出しても撃たれるってわけか…

そして屋上につくと一人が

「ココデゼンインタイキダ！」

そして銃を持っている奴等はいなくなつた。

美佐もいない。たぶんあいつ等に連れて行かれたんだろう。

でも何故だ？

………
何で俺の仲間だけが、連れて行かれるんだ？

おかしい…絶対におかしい。

………
まるで俺に恨みでもあるみたいじゃないか

だったら俺に恨みがある奴の反抗だとすれば

何故俺をつれていけない？

くそ！ 全然わかねーよ！

今俺が出来る事をやるしかない…

「加奈…一つ相談がある」

「何よ…こんな時に…」

加奈は嫌そうな顔をするが今はそんな事はどうでもいい

「俺は…美玖達を助けにいつてくる」

十九話【事件の真相前編】

「あんた正気？ 殺されちゃうかもしれないのよ!？」

加奈は顔を強張らせて俺に言う。

「……今はそんな事を言ってる場合じゃないんだよ」

階段の所には、一人の敵が居る。

……一人位だったら行けるか？

「とりあえず百合華と夕菜は頼んだぞ夕菜」

「……ああわかりましたよ！ これだけ言っとくわ……死なないでね」

「それは大丈夫だ。俺も死ぬつもりなんてさらさらない」

そして俺は下へ進む階段の方向へ進む。

「オイ……オマエコレイジヨウイクト……」

俺はそいつが言う前に顔に蹴りを食らわせてやった。

……もちろん本気だ。本気で気絶させないとやばいからな。
よし……気絶はしてるな。

「あの……すみません。誰かこいつから銃をとって

縄で括り付けといてくれますか？」

俺は屋上にいる人達に声をかけて俺は階段を降りて行く。

……廊下を見渡す限り……いないか……

俺はどんどん進む。

そもそも敵は何人だ？ 俺がみる限り

進行役の奴はグルで敵。

そして三人いた。

という事は四人か……

加奈にはかつこつけて来たけど

あいつ等銃持つてるんだよな……

二人で来られたら俺もやばい……な。

俺はその後もある程度目処をつけて探したがいなかった。
残すは一つ……用具室だ。

俺は勢いよく用具室の扉を開ける。

そこには縛られた二人の少女がいた。

やはり思ったとおりだ……

おまけに二人の敵がいた。

男か…？ 今はそんな事はどっちでもいい。

とにかく……美玖と美佐が無事でよかった。

そして一人の奴が俺に銃を向けながらこう言った。

「オイオマエ！ ソレイジョウウゴクト……」

そいつが全て言い終わる前に思いっきりそいつを殴った。

俺の腕が折れてもいい位と言う位思いっきり。

……久しぶりだな……この感覚は……

・・・

あの日程じゃないが……

俺は久しぶりにきれてる。

折角美玖と美佐と皆で楽しもうと思ったのに。

……全て……打ち壊しにされやがった。

俺は殴った奴の顔を確認しないでもう一回殴ろうとした時

「オイ！ ヤマト！ モウヤメテクレ！ モウナグラナイデクレ」

こんな奴を殴っても俺の心は晴れない。

「おい……そこのいるやつ……」

「ヒッヒッ」

もう一人の奴は悲鳴をあげた。

……それ程までに……俺の顔はやばいか……

「俺を撃ってみろよ。撃てるもんならな」

「ス、スイマセン！ ユルシテクダサイ！」

あ？ 今頃何言ってやがる？

この口調……こいつ女か……？

俺がそいつを殴ろうとした時

「大和……もうやめて……」

「美玖か……？ お前に酷い目にあわせた連中だぞ……」

こんな奴等な……死んでも当然なんだよ」

「大和君……これはね……違うの……」

「ん？ 何が違うんだよ……」

美佐は重い口を開こうとした時に、

「それは私が説明するわ」

「ここにはいないはずのない声……」

そう加奈がドアの所にいたのだった。

十九話【事件の真相前編】（後書き）

来週で【事件の真相】

が終わるはずですが。

特別編【2期！with talk！ 重大発表】（前書き）

誰も特に誰も期待していない

特別編が始まりました！

まあ適当に読み飛ばしてもかまいません。

重大発表もあります。

特別編「2期！with talk！ 重大発表」

大和「そんな事でまた始まってしまいました作者の緩い企画が始ま
ってしまった。

美佐「この所更新スピードも遅いしどうしたんですか？ 作者？」

作者「……この所ここでは言えない位やばい位のストレスがあつて
更新があんまり出来ないんだ。

だからこんな緩い企画をやつて次への更新をまた長くしようと！」

祐二「何作者の都合入れてきてるんだよ！ 読者ドン引き所かギガ
引きだぜ！」

百合華「最近私達の扱いも酷いしー最悪」

夕菜「そうだそうだ！ そんな事してると私たちキャラ崩壊して暴
れまくつてやるからな！」

作者「とりあえず…重大発表があるんだけど…いい？」

大和「この作品を見ている人達にキャラを考えてメッセージで送っ
てきてもらおうと

いうことなんですなーはい。」

美玖「2回死ね！」

作者「グハツエイオオオオ」

あまりにも残酷な事が行われています。しばらくお待ちください。

作者「ああ死ぬかと思った。」

祐二「オイ！冗談は顔だけにしろよ！ 作者！読者様に向かってそんな事出きるわけ無いだろ！」

作者「では応募期間を募集したいと思います。6月10日から7月20日まで

にしたいとおもいます」

大和「駄目だ…この作者…脳天いかれてる」

特別編【2期！with talk！ 重大発表】（後書き）

賛否両論あるかとおもいますがよろしくおねがいします。

二十話【事件の真相後編】

「お、おい何でここに加奈がいるんだよ？」

俺は頭の中がパニックになっていた。何で加奈がここにいるのかさえ俺には状況判断がつかない。

「えー一言で言うとな……これまでの全てのは全部作られた物だと言う事」

「は？」

え？ ど、どういう意味だ？ 全然わからないぞ

「分からないって顔してるわね……じゃあ説明すると長くなるけどいい？」

「ああ……長くてもいいから俺に納得のいくまで説明してくれ」

「これは一週間前の事だったわ」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

私は、お父さんと話している時に、こういう話が出たの。

「加奈、私の経営している会社の事なんだが……」

「うん。どうしたの？」

「それがな……どうしても私の家で役者オーディションがやりたいみたいなんだ」

「え？ 何で？ 普通そういうものは会場とかでやるんじゃないの？」

「いや方針が変わってね…できるだけリアルに近づけた場所でやりたいっていうんだ」

「それで私の家って事？ まさかお父さんそれOKしちゃったんじゃないでしょうね？」

「うん。したけど何か？」

うわあお父さんお人好しすぎ…最悪。私の家に知らない大人達が来るなんて…めんどくさいな

「即刻やめさせて…」

「え？ いやもうOKしちゃったし……」

「お父さん！」

私は思いっきりお父さんを睨んだ。

「わ、わかったよ。じゃあ後一週間あるからそこまでOKか駄目か聞くからさ」

「はいはい」

で私は一週間経っても拒否するはずだった。しかしそこでイレギュラーが発生するの。

それが……転校生の橘美佐さんだった。

で大和と話あって歓迎会の話が出たじゃない？

それで私は、ピンと来た。これは凄い面白い事になるんじゃないかってね。

それで私は早速お父さんに

「お父さん！ そのオーディション会社の人を呼ぶ代わりに条件が

あるの！」

それはドラマみたいな展開で楽しませる事って言う事。
それが私が出した条件。まあここまでリアルにいくと
演技だつてわかつてても怖かったけどね。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「それが事件の真相って言う訳」

「分かった分かった。お前はそんなに俺に殴られたいと……！」

「ごめんごめん！ 本当に悪かったって！」

「で美玖と美佐は全然怪我が無かったと？」

「「うん全然」^{ないよ}」

二人は一緒に答えた。よくもそんな平然でいられるな。

「良かった……美玖と美佐に怪我が合ったんじゃないかと思って本
気で心配したんだからな」

「私も吃驚したよー進行係さんに「これから始まるのは全て演技だ
から」

って言う時何事か？ って思ったもん」

「ていうか何で子供ばかりなんだ？」

「そ、それはね……」

「つまりわざと子供ばかりを狙ったと？」

「いや大和に近づく奴等を排除して二人つきりになろうと……」

「それはそれで不順な動機だな。で、そこにいる二人は誰なんだ？
そのオーディションの人なのか？」

そして俺に殴られた奴ともう一人の奴の顔が露になった。
そこにいたのは知っている奴の……祐二だった。

隣にいる奴は推測的に……祐二の彼女といってもいいな。

「祐二！？ お前何でそこにいるんだ？」

「えーとなーこれは加奈の配慮で、橘と赤羽が暇になるから話し相手になつてやれ

って言われててな……最上からは、大人の人が来るって言ってたから待つてると……お前が来たと言う訳さ。案の定お前は、俺は偽者の銃を向けても

びびらないで俺を何発も殴って……お陰で俺の顔まだいてーよ」

「祐二君？ 大丈夫？」

「えーと君の名前は？」

「桜優^{さくらゆう}湊^{みなと}です！ よくも私の祐二君を泣かしましたね！」

「いや……あの時は状況がわかつてなくてな……」

「そんなの知りません！ 私はあなたが嫌いです！」

「お、おい加奈！ ふざけんな誤解解けよ！」

「……まあこれで大和に近づくライバルが少なくなっただけいいとしましょう」

「つておい！」

「まあ良いじゃないの……これが本当だったら私達は生きていられなかったのかも知れないからね」

「美玖……それもそうだな」

「じゃあこれから遊ぼう！」

「あつ俺帰るわ」

「な、何でだよ大和！ 折角だから遊ぼうぜ！」

「何か今日は疲れた。……誰かさんのせいだな」

俺は後ろから聞こえて来る声を無視してそこから立ち去った。

本当に良かった。誰も死んでないんだよな。全て演技なんだよな……何だっただんだあの感覚？ 普通銃むけられて立ち向かっていく

奴なんているか？

いるとしたらそいつは人間じゃない。絶対おかしい。

あの時俺は、

・・・・・・・・・・・・・・・・

おれじゃなかったみたいだった

いやあの時――死んでもいい。とさえも思った。

ハハハ…本当にやばいんじゃないか？

でもこんな事は二度とおきないだろう。

そこまで気に病むことでもないよな。

そこで俺のポケットに入れてある携帯が震えた。

画面を開くと実玖からのメールだった。

『大和……変な質問何だけど…あの時の大和は……本当に…大和だったの？』

その時俺の背中を鋭い悪寒を感じた。

俺は『お前何言ってるんだよ。俺は俺だろ？』と送信した。

それは俺の中の変化の瞬間でもあった。

二十話【事件の真相後編】（後書き）

ちなみに加奈のお父さんは、加奈の家の警備員に
不審者扱いされて気絶させられました。

その後警察へ連行されて歓迎会が終わる頃に
家に帰ってきます。

災難でしたね。お父さんw

歓迎会は完結しました。

次からは新章START！

全然ラブコメが入ってないですからねw

二十一話【それぞれの思い】

俺は家に帰るといつの間にか寝てしまったらしい。起きた時には、もう夜を迎えていた。起きるとともにお腹も空いてきた為俺は台所へ行くと母さんと父さんがいた。

「あれ？ 百合華と夕菜は？」

俺の問い掛けに母さんは笑ってこう言った。

「あの子達だったらお腹が痛いつて言つて自分達の部屋で寝てるけど」

あいつら……食い過ぎだろ。姉妹だからやる事も同じかよ……

「大和、夕食出来てるから食べちゃいなさい」

「ああわかったよ母さん」

そう言えば……今日昼から食べてないよな。

俺はそう言うのと夕食を食べ始めたのだった。

そして俺は夕食を食べ始めたのだった。

そう言えば百合華と夕菜誰が送つてきてくれたんだろう？

私は思った。大和のあの異変について。

あの時の大和はただ助けたい一心だったのかも知れない。

.....

でも違う。……あれは、大和じゃない。

見た事もない。何なんだろう？

大和だけど大和じゃない。

それとも私の気のせい……

それは私には分からない。

でもあの大和は……私は嫌いだというのはだけは分かる。

あの大和は後で波乱を巻き起こす……ような気がする。
まあ気にしていても仕方が無い。
でも私……何か今日忘れているような？
私大和に謝ってないじゃない！

良かった！ 今日は大成功！

途中で大和が帰ったのは残念だったけど……

まあ疲れてたんだよね。

にしても私も吃驚していたんだから。

あの大和の感じ。何あれ？ 怖すぎ。

睨むような視線に……殺意もやばかった。

真相を知った瞬間普通に戻ったけどね。

まあそれだけ……助けたかったのかな？

でもあんまり大和と話す事は無かったからな

次はどんな事をして大和に近付こうかしら？

そこへ私のお父さんがフラフラになって戻ってきた。

「あつお父さん？ 何処逝ってたの？」

「字が間違ってるぞ……ちょっと拷問に近いことをされていたんだ」

「それ以上聞きたくなからいいけど……ちょっと相談があるんだけど……」

「ん？ 何だ？」

私はお父さんに耳打ちをした。

今日は疲れたなーまあ大和君達と居れて楽しかったけど。
家の中に入るとお父さんが居た。

「どうだった？ 美佐？ 楽しかった？」

「オーケストラとか来たんだよ！ とても凄かったよ！
でも前半はとても疲れたよ」

「……前半の事は聞いてもいいか？」

「ややこしいからやめとく」

「そ、そうか」

私は携帯を見た。いい人達だな。と私は思った。

こんな見ず知らずの私を歓迎会に誘ってくれるなんて。
今までこんな事無かったからかな。

学校によつては、私を無視したりする学校もあった。
でも大和君達は優しい。

私は首につけてあるペンダントを外す。

私の大切な人の慎吾からもらった大切な物。

慎吾。私これからもさ……頑張れそうだよ。

私はペンダントに微笑むのだった。

二十一話【それぞれの思い】（後書き）

今度こそ歓迎会編は終了です。

前は次から新章 start と言っていました

次から今度こそ新章スタートです！

いや待ってください。一話完結物とかも入れていく予定ですw

第二章「モノローグ」(前書き)

今回から新章突入です！

よろしくお願いします！

第二章「モノローグ」

今日から学校に行くしかない。休日がとても楽だった。

とても憂鬱に思いながらも俺は学校へ向かう。

俺が教室の中に入り机の上を見ると

『死ね』『学校来るな!』という文字が黒い油性ペンで書かれているのだろう。

俺は雑巾を水で濡らして机の上の文字を拭う。

どこからか知れないが笑っているような声がある。

正確には笑っているではなく俺の事を笑っているのだろうと俺は把握した。

俺は正確がこの頃はおどおどしていた。いじめる奴等に比べたら俺は匹敵なのだろう。この俺に対するいじめは半年前からずっと続いている。

そしてその中の一人の奴が俺にこう言った。

「おい！ お前机の上の文字が見れないのか？」

あ？ 見えてるよ……それがどうしたんだよ？

「いや……別に……なんでも……」

「うるせーよ！ お前みたいなきもい奴が来ると迷惑なんだよ」

俺は本音をいう事も出来ない。それ程この頃は弱かったんだな。

そして俺は体育館裏に連れてこられた。

敵は五人。そして俺一人。卑怯だ。何で弱い者を寄ってたかっていじめるんだ？

楽しいのかよ。そう思った奴は死ねばいい。

俺が体育館裏に連れてこられてこれから俺がやられる事は一つ。
集団で俺をフルボッコ。そして俺は、惨めに教室に戻るんだ。
皆から哀れみの眼で。

ふざけんな……！

俺はその中の一人を思いつきりぶん殴った。そいつは不意を突かれたのか吹っ飛ぶ。

何だよ……よえーじゃねーか……残りの四人の奴等は、驚愕の表情を浮かべていた。

俺が殴った奴は気絶した。それを見た虐めのグループは

「うわあああああああああああああ」

俺に殴りかかってきた。

鉛のような感触が俺の頬を伝う。いてえ。

すると俺の口の中に鉄の味が広がってきた。――血だ。

「どうだ？ お前が調子にのるからだよ」

俺を殴った奴は笑っている。

「そんなもんか……いじめる奴等ってこんな弱いのか？」

俺は淡々とした声で言った。

「なっ？ お前効いてないのか！？」

「うるせーよ……お前等が俺にした分をここで受ける！」

俺は頬がじんじんと痛いながらも俺は殴りかかった。

気付いた時には俺意外立っている奴はいなかった。

――これは俺の小学校の時のお話。

一話【孤高の狼少年】（前書き）

今回は凄く短いです

一話だと思って見逃してください。

一話【孤高の狼少年】

今日から月曜日。学校へ向かうしかない日だ。

あー……全然歓迎会の疲れがとれてねーよ。

俺は軽く憂鬱になりながらも玄関の扉を開けると、美玖が待っていてくれた。

「おお美玖！ 待ってくれてたのか」

「違う違う。大和を待ってた訳じゃない」

「そ、そうか？」

俺が進もうとすると美玖も着いて来る。

「美玖……俺を待つて」

「待つてない！」

じゃあ何なんだよ？ 他に答えがあるんだったら俺に教えてくれ！

美玖よ。

美玖は怪訝な顔を言いながら俺に着いて来る。

全く……素直じゃねーな。

なんやかんやで俺は、学校へ到着した。

俺が教室の中に入ると静けさが漂っていた。

な、何だ？

誰一人として教室の中で声を発している者はいない。

仕方が無いので祐二に話しかけてみた。

説明をし忘れたが祐二の彼女の……えーと誰だっけ？

桜さんは他校の生徒です。

「祐二……この異様な教室の静けさは何だ？」

「ああ大和。あいつの停学が解けたんだよ」

「あいつつてまさか……革巻の事か？」

革巻と言うのは、この学校では有名だ。あいつは、凶暴だと噂され危険な奴だと言われている。

あいつはしかも他校の生徒を殴ったとして停学処分を受けていた。そんな事から彼……革巻杭一は危険人物となっているという事だ。

……革巻が来るから皆こんな怯えてるわけね。すると静かな教室に扉を開ける音が聞こえた。耳にピアス。ズボンからはみ出しているワイシャツ。そして短い茶色の髪の毛。

来訪者は他でもない……革巻杭一だった。

二話【昔の私と同じ彼】（前書き）

更新遅くなってすみません。

たぶんこの作品は不定期更新になると思います。

二話【昔の私と同じ彼】

この空気を切り裂くかのように教室に来訪者が現れた。

その彼の雰囲気は誰も寄せ付けない虚空を見つめた表情。

その風貌から私は悟った。

．．．．．

彼は．．．私の昔の姿と同じ事を。

人を寄せ付けないような眼光。その眼からは近寄るなど言っているようだった。

私は意を決して話しかけてみた。

「お、おはよう」

私の言葉に彼はいささか吃驚したようだったが、

「ああ．．．おはよ」

彼はただそれだけ言うた。まるで自分に自分の席に戻り音もたてずにゆっくりと座った。

そして私は小声で大和君に囁く。

「（ねえ大和君．．．あの子は誰なの？）」

「（あいつは……美佐が来る前に停学になってた革巻杭一。

今日停学が解けたんだよ）」

「（何で停学になったの？）」

「（俺も良くは分からないが……祐二が言うには暴力沙汰らしい。

他校の生徒を病院送りにしたとか。）」

私はそうは思ってたなかった。ただの不良の喧嘩だと言えば解決するかも知れないけど

革巻君には必ず事情がある。そう思っている自分がいる。

彼の外見は強がっているが全く中身が無い。

絶対に……なんかあるに違いない。

でも何で私は、彼の事を思っているのだろう。

理由はすぐに分かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

やっぱり彼は昔に似ているから構いたいんだな。

だから彼を助け出してあげたい。

「大和君。今日時間ある？」

「ああ……無いけどどうした？」

「少し付き合って欲しい」

とりあえず革巻君が停学になったかの真相を解かないと。

三話【怪しい二人組】

放課後。俺は美佐に頼まれてある人物の尾行をしている所だ。

「えーと美佐……これは？」

「見ての通り革巻杭一君の尾行よ」

そう。俺は今革巻の素性を調べる為尾行の最中である。俺は帽子に眼鏡口にはマスクと

最早怪しい人と言われても仕方がない。ちなみに美佐も同じような格好だ。

そして革巻はあるファミレスへと入っていった。何か食うのか？

「大和君。乗り込むよ！」

「そんな昔の刑事じゃあるまいし……」

突っ込みを入れつつファミレスへ入る。すると

「いらっしやいませ……お客様二名様でしょうか？」

早速作業着に着込んで現れたのは革巻杭一だった。バイト中かよ！

そもそも不良がバイトなんかするのか？

そんな疑問を持ちながら俺は革巻に案内される。

「」注文どうぞ」

「じゃ俺コーヒーで」

「じゃ私もそれで」

それだけ言つと革巻は「かしこまりました」と言いどこかへ戻つて
いった。

俺等みたいな不審者とも言つていい二人をよく店内にいたな……

「大和君。緊急事態よ」

美佐が青い顔をして俺にそういつてくる。嫌な予感が。

「——私お金無いよ」

「は!？ 美佐！ お前お金持つてるんじゃないのか!？」

ちなみに俺は金など持つてきてるはずも無い。や、やばいぞ……本
当にピンチだ。

午後八時……もうこれで三時間だ。

あのいかにも怪しい二人組。怪しすぎる。そもそも外見がマスクに
眼鏡に帽子つて……

絶対おかしいだろ。埒が明かないので俺は、

「店長。俺が問いたたしてきます。食い逃げ犯かも知れませんが」

「分かった。頼むよ革巻君……刃物を持ったりしているかも知れないから気をつけてね」

店長に言われ少しびくつとなったもの俺は身構えながら二人組に歩を進めた。

「お客様どうされたのでしょうか？ もう入店して三時間になりま
すよ。」

早くお会計を」

そついうと二人組は会話を始めた。

「美佐。もう無理だな」

「確かに、これは失敗ね」

そついうと二人は顔にある装備(?)を全てテーブル上に置いた。
するとおもやけになったのは

「龍蜂と橘!？」

俺は絶叫に近い声でそう発言した。何でこいつらが俺の店に!？

四話【革巻の正義】

あーあばれちゃったか。まあ俺はすぐばれるとは思ってたけどな。

「で、革巻はバイト中か？」

俺の問いに少なからず革巻は動揺したがこう答えた。

「まあな。二人は何でこんな遠いファミレスなんかにいるんだ？」

うついきなり確信をついてきやがったな。ここは何とか言い訳……

「私はね……革巻君が何で停学になったか聞きに來たんだよ！」

美佐！　そこは少しずつ確信に迫っていけばいいじゃないか。

「えーとな……道端で他校の生徒に絡まれてる生徒が居てな……そいつを助けようと思って

その絡んでる連中に「やめろ」って言ったら殴りかかってきてな。それで助ける為に実力行使に出たというわけさ」

……それはつまり革巻は悪くないんじゃないのか。それは明らかに絡んでた奴等が悪いだろ。

「じゃあ革巻君は悪く無いじゃん！」

「そうは言われてもな……この事がおおやけになるとまず【被害者】が迷惑になるんだよな。」

.....

俺もそうだったからな」

「それはどういう意味なんだ？ 革巻？」

革巻が話してくれた話はこうだ。彼も小学生時代虐めにあっていたらしい。

しかし彼は虐めるグループを全員入院させた。

すると彼の少ない友達に革巻に怯えて彼は孤独になった。ということだ。

「で、ちなみに俺のちゃらい外見は全て作り物。そうすれば人も俺についてこないからな」

俺は沈黙する。革巻にそんな過去があつたなんて……俺は単に革巻を不良だと

勘違いしていた。何だよ。普通にいい奴じゃないか。

「——大人達はよく言うよな。『やられたらやり返せ』

はつきり言つてこの言葉が俺はだいつきらいだ。

そんなの戯言なんだよ。虐める奴等がわりーのに何で俺達が責められるんだよってな」

刹那。たった十秒間の間誰もが口を開かなかった。最初に開いたのは美佐だった。

「じゃあさ！ 私と友達になろうよ」

「は？」

「決定ね！ 私と革巻君……いや杭一君は私と友達！」

革巻は呆れたのか良く状況がわかってないのかポカンという風な顔をしている。

「よし俺も革巻とは友達になる！ お前の支えになってやる！」

なんかノリなのか良く分からないが俺も何か美佐に乗るぜ！

「え？ どういう意味なんだよ？ 俺は意味が分からないのだが？」

「いいんだよ！ 革巻。友達記念の代わりにコーヒー奢ってくれよな」

「私もねー」

「わかつ……ってお前等それが目的か！？」

俺と美佐はもう自動ドアの目の前まで来てる。後は……逃げるだけさ。

俺は全力疾走で走りファミレスが見えなくなったところで歩き出した。

なんか明日から楽しくなりそうだなと思いつながら。

五話【不良と中学生の接触】（前書き）

美佐視点でどうぞ！

五話【不良と中学生の接触】

放課後。私は、教室の隅にいて窓をずっと眺めてる革巻君に話しかけた。

「またお前等か？ その前にコーヒー代返せよ！ 痛い出費だったんだからな！」

革巻君が怒りの表情を浮かべているがそんなのは気にしない。

革巻君がバイトをしている所から部活に入っていない事は確かだ。

「革巻君！ 遊びに行こうよ！」

「俺の皮肉はスルーなのか！？」

すると横から入ってきた大和君がやってきて革巻君の肩を叩いてこういった。

「いいじゃねーか！ 学生らしく遊びに行こうぜ」

「ちよっお前も！ 昨日のコーヒー代返せ！」

「よし！ 美佐！ ゲーセン行こうぜ」

「そうだね！ ほら！ 革巻君もぼーとしてないで行こうよー！」

私は強引に革巻君の腕を掴んで連れて行く。

「おい！　ちよつと痛いって……！」

そして私達三人はゲームセンターへと向かう。

ちなみに美玖ちゃんと加奈ちゃんは、部活で来れないらしい。

祐二君を誘うとしたんだけど大和君に何故か止められた。

大和君曰く「あいつは連れて行くな。絶対にな」と言っていた。

……一体どんな理由なんだろう？

そして私達はゲームセンターに到着した。

「なあ美佐。ボーリングやらないか？」

え？　ボーリング場なんてあるの？　凄いな。

「いいよー負けないからね！」

「ビリだった奴は罰ゲームって言うのはどうだ？」

革巻君はよっぽど自信があるのかそう提案してきた。

「——いいよ！　勝負しようよ！」

私達は見えない火花を散らしていた。

三時間後。俺は衝撃のあまり開いた口が塞がなかった。

劉蜂。二七七。

橘。二六五。

俺。一八七。

俺……結構スコアいいのにビリって……今時の高校生はこんなに凄
いのか？

まあ俺も高校生だけどさ。

「じゃあ革巻君罰ゲームね」

「俺フアンタグレープ」

「じゃあ私はコーラで」

……昨日のコーヒーの件を思い出すのは俺だけか？

仕方が無い負けたんだから。負け犬の遠吠えだ。

俺は渋々外にあったであろう自動販売機のところへ向かった。

なぬ！？ コーラとフアンタ缶ジュースなのに一五〇円すんじゃね
ーか！

スーパーで買ったら安いのに。

なんかこの頃不運だと思いながら道に視点をあわせてみると、

「嬢ちゃん。一緒に何処か遊びにいかないかい？」

「やめてください！ 話してください！」

制服姿の女子が絡まれている。制服姿なのでたぶん中学生か高校生だろう。

女子相手に三人がかりかよ……いつ見ても昔の俺を思い出して苛々するな。

「やめろって……離してやれよ」

咄嗟的に話しかけてしまった。やれやれ。これも慣れかな？

「なんだデメエ！……ってお前は『悪魔のキラー革巻』じゃねーか！

見た奴全てを病院送りにするっていうあの……！」

誰だよそれ？ 俺は戦闘狂じゃねーよ。誰だそんな噂流したの？

すると三人は慌てながら駆け足でどこかへ行ってしまった。

「お兄ちゃん！ ありがとうございます！ 助けてくれて」

良く見たら可愛いじゃん。絡まれるのも良く分かるかも。

「いやいいって。とりあえず次から絡まれるなよ?」

「はい! ありがとうございますです!」

なれない敬語を使っているのか良く分からない言語になっていたが、彼女なりのお礼なのだろう。

「じゃあ俺は行くから」

そういつて俺はそこを後にしたのだった。これってもしかして運命の出会いってやつ?

ハハハ。何考えるんだろうな俺。

「おい買つて来たぞ二人共。有難く飲んでくれ」

橘と劉蜂に缶ジュースを渡した。するとたぶんあの時俺は、缶を無意識に振っていたのだろう。

泡が二人の顔に直撃した。

「うわ! なんじゃこりゃああ」

「革巻君! これは仕返しなの!?!」

二人は騒いでいるが何故か俺に笑みが零れた。

久しぶりだなこの感覚。凄い楽しい。

俺は、仲間っていいなと思い出した瞬間でもあった。

俺は革巻と美佐と一通り遊んだ後家へと帰ってきた。

結構遅くなっちまったな。俺が家の中に入ると

百合華が凄い顔で俺にこういつてきた。

「大和！ 大変だよ！ 夕菜が……夕菜が……！」

「どうした！？ 夕菜になんかあったのか？」

「とりあえず夕菜のところへ来て！」

俺が夕菜の部屋に行ってみると夕菜は案の定

「うー……痛いよー！ 熱いよー！」

大声で騒いでいた。

「お、おい夕菜？ どうしたんだ？」

夕菜の頬はピカチュウの頬みたいに赤くなっている。

「夕菜ね……お兄ちゃんの他にも好きな人が出来ちゃったの！
どうしよう……お兄ちゃん？」

妹よ……それがノーマルなんだよ。

「で誰なんだ？ 夕菜？」

「それが分からないの……」

は？ 普通に同級生を好きになったとかじゃないのか……おじさんとか言うオチは許さん。

「——特徴は、そう！ お兄ちゃんと同じ制服着てたよ！」

ふむふむ。という事は、俺の高校の生徒という事だよな。

「そう！ 今日始めて会ったんだけど……ゲームセンターの自
動販売機に居て
両手に缶ジュース持ってたよ」

今日かよ！？ 両手に缶ジュース持ってるやつって完璧パシリに使
われてんじゃないか。

両手に缶ジュース……？ まさか。もしかして……

「その缶ジュースって機種わかるか？」

「分かるよー。えーとねーたぶんコーラとブドウのジュースだった
よー夕菜の記憶が正しければ」

えーとそんな事してる高校生ってもう一人に限られて来るよな。

——革巻だ。

その前に革巻しか浮かばん。

どうしてこんな事になってるんだ？

五話【不良と中学生の接触】（後書き）

題名の不良と中学生は

革巻と夕菜の接触でした！

六話【共通する過去？ 前編】（前書き）

受験勉強が忙しくて更新が遅くなるかも知れません。

……感想をいれてくれれば少し早くなるかも……（笑）

六話【共通する過去？ 前編】

「——そういうわけで革巻、お前には我が妹の夕菜とデートをしてほしいわけだ」

開口一番。俺は教室で、劉蜂の一言で固まった。

そういう訳って何だよ！ どういう意味？

「ごめんな、劉蜂。俺の矮小な脳じゃお前が何を言っているのか意味が分からん」

「じゃあ、今週の土曜日。甲州駅の時計台の前に妹がいるから」

」

それだけを言い残し劉蜂は去っていった。あの野郎……！ 絶対俺の発言に

耳を傾けようとはしないのか！？

俺は、溜息をつきながら、携帯を見つめた。

早速だが、あの夕菜って子のデート先を決めなければいかんしな。一応俺男だし……

何故か知らないが橘と劉蜂とで俺に臨機応変能力が身についてしまったらしい。

……べ、別にデートを気にしてる訳じゃないんだからねっ！

……………俺キモッ死ね！

自分で言って物凄い吐き気を催した俺だった。

そうして日曜日。デート当日。

くそ！ 妙に緊張して眠れなかったぜ……！

という事は全く無くぐっすり眠り、元氣澁刺状態だ。すると俺の後方から声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん！　こんにちは！」

その声の主は――あの時俺が助けた少女だったのだが――
その姿を見た時……俺は不覚にも心臓がドキッとなってしまった。
俺に電流走る……！

単純な一言感想。

『可愛い』そう言わざるを得ない……！

「とりあえず行こう……その……夕菜さん？」

おい！　何俺敬語になってんだよ！　相手は中学生だぞ！？

「お兄ちゃん！　私の事は夕菜でいいから！」

「お、おう。ゆ、ゆうな？　とりあえず何処か行こうか？」

「うんっ何処行くの？」

辞めてその上目使い……俺やばくなるから、色々と。

「じゃ、じゃあファミレスへ行こうぜ。昼は食べたか？」

「ううん。まだ食べてないよー」

「じゃあ行くか」

ファミレスの中はカップルや親子連れやカップルなど大勢の客がいた。

適当に俺と夕菜は『えびドリア』。俺は『たらこスパゲティ』など無難なものを注文した。

「あのさ……いきなりんだけど、俺怖くないの？　ピラスとか金髪なんだけど」

とりあえず会話を振ってみた。

「全然怖くないよー。……だってお兄ちゃんは私を助けてくれたじゃん！ー」

「そ、そうか？　ならいいんだが」

というか気になったんだが……これ傍から見たらヤンキーが可愛いらしい中学生をファミレスに……。

うげ。考えるのは止そう。色々ときつい。

「ねえあの時さあ……。何で夕菜を助けてくれたのー？」

「ああ。あれか？ えーとなー……。恥ずかしい話なんだが、俺昔虐められててな。そういう光景を

目にするとちよつと力つとなるというか」

俺がそう言った時、夕菜はスプーンと止め、エビドリアを食べるのを辞めた。

「そ、そなんだ……」

「まあそれも昔。この前も他校の生徒に喧嘩売られたから、全員病院送りにした。そんでもってその中の一人が通報して俺は停学処分。これは劉蜂から聞いたか？」

夕菜に聞いてみるが、返答は帰ってこない。……まあこの話を聞いて明るくなれる訳も無いか。

「……も」

下を向きながら小さな声で言う夕菜。その声は悲しそうだった。

「私も……小学校の時虐められてたんだ」

夕菜は搾り出すように声を出す。——夕菜は泣いていた。

六話【共通する過去？ 前編】（後書き）

受験勉強全然できなかったよ…orz

懲りずに3期 with talk (前書き)

息抜きです。

懲りずに3期 with talk

作者「いやあ……読者の皆様、こんにちは。作者です」

大和「……なんか、月一更新になったみたいだけどなんかあったのか？」

作者「作者だつて大変なんだよッ勉強やんなきゃ……。不合格↓発狂↓絶望↓ニートになっちまうだろうが！」

大和「いや、知らんがな」

作者「わかつてくれたのか？」

大和「……この作品が見切り発車だつて事も要らない伏線を張りまくって作者が困惑してるのも

俺はよく知ってるぞ……で、思ったんだけど」

作者「ん？」

大和「最近、新キャラの杭一って奴、キャラ濃くないか？」

作者「……主人公交代もありえるかも」

大和「……マジ？」

作者「いや、大和は8話あたりで活躍してもらってから大丈夫」

大和「へえ。で、ずっと思ってたんだけど、あらすじのヤンデレは

いつでてくんの？

ヤンデレファンが待望してるんじゃないか？」

作者「……………」

大和「（不味い事聞いちまったかな？）」

懲りずに3期 with talk (後書き)

32話は今日中に書きます。

7話【共通する過去？ 中編】（前書き）

初期の文章と今の文章比べたら差が歴然！

7話【共通する過去？ 中編】

取り敢えず俺は、夕菜をファミレスの外へ誘導し、外へ連れ出した。ベンチに夕菜を座らせて、俺は自動販売機の所へ行き缶ジュースを適当に選び夕菜に渡す。

すると夕菜は泣き止んだのか何かを話し始めた。

小学生の時に父親が死んで虐められていたこと。

それを夕菜の兄の劉蜂が助けてやったこと。

夕菜は嬉しそうに、

「お兄ちゃんが助けてくれてからね、夕菜に悪口を言う人はいなくなっただよ」

俺は黙って聞いていた。……俺のいじめの終息は全員病院送りにした事だったんだが。

その後、俺は親に勘当され一人暮らしをしている。

だからファミレスで働いたり、コンビニでバイトをしているというわけだ。

「って夕菜の話聞してる？」

「……っあ？ ああ……聞してる」

勿論？だ。

「お兄ちゃん、ゲームセンターに行こう！」

「え？ いいけど」

「じゃあ、レッツゴー」

勢いよく、ベンチから立ち上がり、俺の前を歩き出す夕菜。

さっきまでの泣き顔は何処にいったんだろうか。

たぶん、今の俺は変な笑みを浮かべているだろう。

——でさ、俺と夕菜を不気味に尾けてきてる奴がいるんだが。

うん、夕菜の兄貴。

7話【共通する過去？ 中編】（後書き）

ここで大和君の登場です。

八話【共通する過去 後編】（前書き）

ミニ登場人物紹介。…読者の皆さんは絶対読むだろう。

赤羽実玖……大和の幼馴染。

最上加奈……お嬢様。

山中祐二……大和の親友。

橘美佐……転校生だよ。

八話【共通する過去 後編】

深く帽子を被り、サングラスを付けてさらにはマスク装備という不審者極まりない

男（夕菜の兄）が俺達を尾行しているのだ。……アレではれないとも思っているのだろうか。

思っていたとしたらアホだ。

「どうしたの、お兄ちゃん、なんか、拳動不審だけど」

「……いや、何でも無いんだ、何でも無い……」

アイツを突き出し洗い浚い喋ってほしい所だが我慢だ。

まあ今は……楽しみですか。

■

『その大根は抜いちや駄目。その大根を抜くと……！』

『いや、俺はこの大根の為に生きてきたんだ……』

『駄目よ。その大根は』

『——この大根を持ち帰ったら俺……結婚するんだ』

『マルコオオオオオオ』

この台詞を言った主人公（ダンディな俳優）は適役に殺されました。

『世界の中心で味噌汁を啜る〜大根 forever〜……やべえ、1200円糞無駄だったわ。』

俺と夕菜は映画館に来て、今の映画があつたので見ていたのだが……。

感想としては『何この糞映画』だ。

たぶん、今期、見なければ良かった映画ベスト1にランクインされるだろう出来。

なんだが。

何故、夕菜が泣いているのが俺には全く俺には理解不能だ。

「悲しすぎるよ……最期の晚餐が味噌汁だなんて……ハンバーグ位食べさせてあげようよ」

そこかよ！？ その前に題名が味噌汁だろうが。

「感動したよね、お兄ちゃんも」

「あ、ま、まあ少し……」

……後不審者が啜り泣きをしていたような気もしたがスルーだ。めんどくさいし。

映画位俺に涙を流させてくれよ。

■

俺もう泣きたいわ。

「お、お兄ちゃん……もういいよ、別の所行こうよ」

「……俺に喧嘩を売ってくるとは、なんという勇ましい奴だ……。ここまで来たら——戦争だ」

—— UFO キャッチャー。俺に勝負を挑んでくるとは……俺は今六千円をコイツのせいで浪費しているのだ。

「お兄ちゃん、もういいって。あの熊の人形は諦めようよ——」

俺の横で夕菜が何かを言っているが完全無視。

「俺の破滅か。UFO キャッチャーが勝つか。勝負だ」

残りの俺の金——2800円。

俺は気付かなかった。UFO キャッチャーは二度と戻ってこない貯金箱だと。

そしてバイトで必死に稼いでいる生活費にも手を出してしまい明日からの生活に困った事など。

まあ、どうでもいいことだった。

結果的に熊の人形は取れたのだから。

「この熊の人形ありがとね。夕菜大切にするよ」

「……別にいいんだ。俺はもう屍なのだから」

夕暮れ。ついに俺達は別れの時を迎えた。……終わってみると何

故か寂しいような

哀愁感に襲われる。……今日は気分良く眠れそうだ。

「あ、後お兄ちゃん……。今度から一君って呼んでもいい？」

「一君……なんかそんなあだ名で呼ばれてないから照れるけど……いいぞ」

今度は夕菜が俺に近寄ってきて小声で、

「じゃあね。一君」

そう言っただけで消えてしまった。反則だろ。

見えなくなった頃、不審者に蹴りを入れようと思い後ろを振り向いた、が。

「アイツ……いねえ……!？」

……月曜日に、会ったら制裁を加えてやる。

■

月曜日の朝。……俺が教室に入ると、劉蜂や赤羽やら最上やら橘やら山中までいた。

……何故か皆が皆俺をニヤニヤしているのは俺の気のせいだろうか。

すると全員が笑いながら、

「……………一（君）……………」

……はっはー。絶対劉蜂は冥土に送ってやる。

後日談。なんと劉蜂はビデオカメラで俺と夕菜を撮影し先程まで鑑賞会をしていたようだ。

……日本でプライバシーの権利ってあるよな？

八話【共通する過去 後編】（後書き）

共通する過去編終局。……いやはや長かった。

…一君（笑）編はもう少しだけ続きます。

もしかしたら近いうちに投稿するかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4492/>

love every!

2010年11月28日09時02分発行